

活断層学会 2012 年度秋季学術大会報告

日本活断層学会 2012 年度秋季学術大会を、2012 年 11 月 16～17 日に京都大学宇治キャンパスのおうばくプラザで開催した。参加者は、16 日が約 110 名で、17 日が約 120 名であった。18 日には巡検を行った。

16 日の午後と 17 日の午前の一般研究発表では、11 件の口頭発表と 17 件のポスター発表が行われた。口頭・ポスター発表とも、ベテラン～中堅研究者に混じって、若手研究者の意欲的な発表が目についた。ポスターセッションのコアタイムは 1 時間と短かったが、口頭発表会場とポスター会場が隣接していたこともあり、休憩時間を使ってポスターの前で議論をする姿が目立った。またポスター会場には、「2012 年日本の活断層・フォトコンテスト」の入賞作品および応募作品が展示され、多くの人で賑わっていた。

16 日の 18 時から、ポスター会場と同じフロアで、懇親会を開催した。懇親会には約 60 名の参加があった。冒頭、京都大学防災研究所の中島正愛所長からご挨拶をいただいた後、カフェレストラン「きはだ」による料理や飲み物を手に、情報交換や交流の場として大いに盛り上がった。最後には、次回 2013 年度大会の開催地に内定している茨城県つくばを代表して、吉岡敏和会員より日程や会場についての紹介があった。

17 日午前の口頭発表終了後に各賞の受賞表彰式が行われた。学会賞は、尾池和夫会員と岡田篤正会員に贈られた。論文賞は、「丸山 正・遠田晋次・吉見雅行・安藤亮輔・高田陽一郎・斎藤英二・林 舟・小俣雅志, 2011, 2008 年岩手・宮城内陸地震に伴い岩手県奥州市国見山南麓に出現した地震断層北端部の性状, 活断層研究, 34, 1-12」に贈られた。若手優秀講演賞は、石村大輔会員「近畿地方北東部における第四紀後期の地殻変動」と安田大剛会員「フィリピン断層帯ラガイ湾海底断層の詳細横ずれ変位構造」に贈られた。フォトコンテストの受賞者も表彰された。

一般公開シンポジウム

大会 2 日目となる 11 月 17 日の午後 1 時 30 分から、「近畿の活断層と大地震」と題した一般公開シンポジウムが開催された。

竹村恵二会員の司会のもと、中田会長の挨拶に引き続き、岡田篤正会員による「近畿地方の活断層の特徴と地震長期予測」、杉山雄一会員による「越前岬～若狭湾周辺の海域活断層」、小松原琢会員による「京都の歴史地震」、入倉孝次郎会員による「東日本大震災に学び、南海トラフ地震にいかにかに備えるべきか」、尾池和夫会員による「これから起こる大地震-西日本の場合」の 5 件の講演が行われ、最後に全員が壇上に登っての総合討論でシンポジウムを締めくくった。

まず前半の 3 件の講演では、京都を含む近畿地方の活断層と過去の地震についての紹介があった。岡田会員の講演では、近畿地方の主要活断層の概要と地震調査委員会による長期評価の結果が紹介され、さらに原子力発電所敷地の断層調査についても問題提起があった。杉山会員の講演では、福井県の沿岸沖合の海域活断層について、最新の調査結果に基づく紹介があった。小松原会員の講演

では、京都周辺で過去に起きた大地震の歴史的背景と都市の発達との関係が述べられた。

休憩を挟んで後半は、今後発生することが予測される大地震とその対策についての講演が行われた。入倉会員の講演では、2011年の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）を機にした地震調査研究推進本部の施策の見直しと、今後の南海トラフで発生する地震の対策などの紹介があった。尾池会員の講演では、今後の震災の軽減のためには、国民が日本列島の地質構造や地震活動の特徴をよく理解すること、国や自治体はそのための情報を速やかに提供することが必要であることが述べられた。

最後の総合討論では、活断層や地震活動に関する情報の流通や共有についての問題が取り上げられ、会場からの質問も交え、時間を延長しての活発な議論が交わされた。

当日は、あいにくの雨天のためか、一般参加者が予想より少なかったのは残念だったが、内容は非常に充実したものになった。

巡検

最終日の巡検では「比良山地周辺の活断層と歴史地震」と題して、小松原 琢会員と岡田篤正会員の案内により、湖西地方の活断層と、1185年の元暦地震および1662年の寛文地震の地震史跡を巡った。この巡検には、案内者2名に加え会員・非会員計22名が参加した。

最初の見学地である堅田断層ジオスライサー地点では既に重機を用いた大規模な宅地造成が始まっており、大規模改変を受けていない堅田断層を観察できる最後の機会となった。地形的には低断層崖のように見えるもののボーリングによる予備調査によって幅広い撓曲と判断されたことからジオスライサー調査に切り替えたという調査の経過と、元暦二年(1185年)にこの断層が活動したことをきわめて明確に示した断層調査の結果に対して多くの質問が出された。次にジオスライサー調査と共に元暦地震時の地殻変動を物語る堅田浮御堂遺跡と、平安時代の船着場跡に比定されている真野の入り江跡を訪ね、堅田断層の運動に伴う断層東側の沈降と西側の隆起を物語る傍証について議論した。真野の入り江跡の見学後、典型的な地塁をなす小野の孤立丘とその断面の露頭を観察した。露頭は個人の所有地にあるが、公道からでも急傾斜した地層を観察できるため、露頭の解釈に熱のこもった議論がなされた。バスは比良山麓を北に向かったが、その途中では岡田篤正会員による自身で撮影された空中写真の解説と地質構造に関する詳しい話に参加者が耳を傾けた。昼食後に訪ねた饗庭野断層トレンチ地点(見学)は調査当時とほとんど土地利用に変化がなく、調査時の状況を推定することができた。

巡検後半では花折断層北部と寛文地震の地震史跡を訪ねた。後半は特に地形・地質について岡田会員が、歴史地震について小松原が解説しながらのバス旅行となったが、ほとんど居眠りもなく騒がしい(!)ほどのにぎやかさだった。朽木陣屋跡では、かつて行われたトレンチ調査地点が跡形もなく人工改変によって地形が変えられてしまっており、活断層調査のタイミングの重要性やそこで出現した大規模な地質断層に関する解説と共に、朽木における災害記録について議論がなされた。11月中旬の時雨交じりの天気の中であったが、朽木郷土資料館館長による暖かなおもてなしによっ

て暖を取ることができた。朽木谷から安曇川を遡り、寛文地震で最多の犠牲者を出した町居崩れ跡に向かう途中は天気に恵まれなかったものの、現地では何とか標高 1000m の町居崩れ源頭部を下から眺めることが出来た。また、町居崩れの崩壊堆積物は現在土取場として盛んに採掘されており、その保護を求める意見も出された。町居崩れの上流側に位置する葛川明王院は古代以降聖地として多くの記録が残されており、当地に伝えられる伝承に基づいて町居崩れの天然ダムの堪水量が正確に推定されている。ここが最後の見学地となるが、美しく紅葉した古寺には独特の趣があり、時雨まじりの天気ながらも秋の近江を楽しむことが出来た。

巡検後に川崎会員から送られた集合写真には多くの参加者から感謝の意が述べられた。また、この巡検にあたっては豊蔵会員・堤会員の献身的な協力をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げます。

今回の大会は、地方での開催ということで、どれくらいの方が参加してくださるか心配したが、結局例年と同じくらいの参加者数となった。ただし、秋の観光シーズン中の開催ということで京都市内のホテルの確保が難しく、遠方からの参加者にはご迷惑をおかけした。

最後になりましたが、会場の京都大学防災研究所地震予知研究センターの皆様には、大変お世話になりました。また、本大会の設営・運営にご尽力いただいた学会事務局・アルバイト諸氏をはじめ、関係の皆様には厚く御礼申し上げます。